生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです。

あうん　教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥　第　15　号　令和３年６月７日

おまえは孤独だが独りぼっちではない。

宮部みゆき『あんじゅう 三島屋変調百物語事続』

一度にひとりずつ、百物語の聞き集めを始めた三島屋伊兵衛の姪・おちか。ある事件を境に心を閉ざしていたおちかだったが、訪れる人々の不思議な話を聞くうちに、徐々にその心は溶け始めていた。ある日おちかは、深考塾の若先生・青野利一郎から「紫陽花屋敷」の話を聞く。それは、暗獣“くろすけ”にまつわる切ない物語であった。人を恋いながら人のそばでは生きられない“くろすけ”とは―。　（「BOOK」データベースより転載）

電気がつかない薄暗い茶の間にその犬はきちんとお座りをして庭の方を見ていた。僕が戸を開けると振り返り、頭を低くしながらしっぽを左右に思いっきり振って近寄ってきた。「おまえはまだここにいたのか」僕が頭をなで顔を近づけると冷たい鼻先を押しつけた。「ここはもうおまえのうちじゃなくなるんだよ」僕がそう言うと、動きをとめてじっと僕を見つめるのだった。

―― そんな夢を見たのは、僕の実家を手放すことに決めた、まもなくのことだった。

その犬はもともと僕の家で飼っていた犬の彼女(?)だった犬で、どこから来たのかわからないノラだった。全く自由で、うちにいたかと思えば僕の通っていた小学校にやって来て、我が家の呼び方とは違う名を呼ばれてしっぽを振っていた。何をされても穏やかにしっぽを振っているやさしい犬だったが、そのうち僕のうちの犬が突然死んでしまったら、そのままうちに居着いてしまった。我が家も呑気なもので飼い犬の意識は全くなく、登録と予防注射はしたけれどやっぱり放し飼いのままだった。自由にうちの玄関をあけて出入りしてそこに寝ていた。そのうち近所ではすっかりおなじみの犬となり、近所のスーパーでは買い物をしている僕の母を入り口で待つようにもなった。家に母が見つからないときはその店に入って行って、店員さんから「母さん来てないよ」と言われると帰って来るという具合だった。今考えればなんともおおらかな時代だった。

そんな我が家も、父が亡くなり、姉、僕と家を離れていった。最後に母一人が残り、その暮らしをずっと見ていてくれたのはその犬だった。大学３年生であった僕が帰省する直前、その犬は息をひきとった。母が朝起きたらもう動かなくなっていたという。「もう少しで英則が帰ってくるよって言ってたのに」泣きながら母が犬の死を僕に伝えてくれた。その後、母は犬を飼うことはなかった。

そんな母も姉のもとに行くことになり、家を離れてずいぶん経った。空き家はすぐ傷む。たまたま家を購入してもいいという人が現れて先祖伝来の土地と家を手放すことになった。その矢先の夢だった。すぐ、「くろすけ」を思い出した。

宮部みゆきさんの三島屋変調百物語シリーズ『あんじゅう』の中にでてくる不思議ないのち、「くろすけ」。こわくて、かわいい物の怪。それは紫陽花屋敷に住むその屋敷の魂、気みたいなものではないかという。僕の夢も似たようなもので、家の念（合浦家がその土地に根付いたのは江戸時代末期だ）があんな形で「ずっと待っているよ」と伝えてくれたのではないか。まあ、僕の勝手な思いだ。

それはともかく『あんじゅう』は南伸坊さんによる読売新聞連載時の挿し絵がそのまま掲載されているとても可愛い本だ。中身は怪談話なのだが、色々なものを抱えて生きる人の懸命な姿が情感豊かに描き出される。この「暗獣」の話ではくろすけを置いて屋敷から去る加登新左衛門がこう語る。

「おまえは孤独だが独りぼっちではない。おまえがここにいることを、おまえを想う者は知っている。」

この話にでてくるすべての人が優しい。

家を売る最後、僕は自分が育ってきた証を一つずつ見つけては感謝し家に別れを告げた。もちろん犬が寝ていた場所にも。

僕の幼い頃の思い出は常にあの家とともにあり、そして今も心の中にある。